

年間第二十主日

2017.8.20

マタイ 15・21-28

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高神父

今日の福音に登場する名前も記されていないカナンの婦人は、福音書の女性たちの中でも、最も生き生きとした魅力的な女性の一人です。

彼女もまた、イエスと出会った他の多くの人々と同じように、イエスに聞き届けてもらいたい悩みを抱えて、一途にイエスに向かって叫びます。「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。娘が悪霊にひどく苦しめられています」。母親にとって、わが子がそのような状態にあることは、わが身が悪霊に苦しめられるよりも辛いことです。なまじ自分は正気であるからこそ、母親にとっては、当の本人にとってよりも、もっと辛いこととなります。娘が悪霊に苦しめられている姿を見るたびに、自分自身が悪霊に取り付かれているような経験をしていたにちがいありません。その苦しみの中から、彼女は必死になってイエスに追いつこうとします。そのあまりのしつこさに、弟子たちが彼女を早くおいはらってくださいと願うほどに、この母親は叫び続けたのです。

イエスにつき従う弟子たちは、このような光景自体は、他の時にも何度も目にしていたはずですが、自分たちが付き合いきれないと思っていた人々の願いを、結局はイエスが聞き届けてくださったことを、弟子たちはいやというほど体験させられていたはずですが、そのような弟子たちの体験の中で、このカナンの女性のことが彼らの心に刻まれ、それが福音書に記されるようになったのは、この異邦人の女性とイエスのやり取りが持っていた意味の重大さに、弟子たちが後になって気づいたからだといえ、こじつけに過ぎるでしょうか。

この母親がイエスと出会うことができたのは、イエスがガリラヤの境を越えて、ティルスとシドンの地にまで足を踏み入れられたからです。その地に生まれ育ったカナンの女性であるこの母親はそこでイエスと出会うのです。その異邦の地でイエスが行われたことは、福音書には他に何も語られていません。福音書を見る限り、イエスはただこの異邦の女性と出会うためだけにその地を訪れたかのようです。そしてそれで十分だったのです。イエスの復活後、復活のイエスの命令に従って異邦人への宣教を開始した最初の教会にとって、今日の福音に語られているイエスと異邦人であるカナンの女性の出会いの物語は、教会の今を照らす光となったのです。最初の教会から始まった異邦人への宣教は、復活のイエスの命令であると同時に、弟子たちを連れてティルスやシドンまで足を運ばれたイエスご自身に遡るものであることを、今日の福音は語っている

のです。

「主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください」とこの母親は叫びました。彼女はどこでイエスのことを知って、イエスに向ってこのような叫びを上げたのでしょうか。マタイ福音書のイエスが宣教活動を開始された頃の記事を見ると、イエスはガリラヤの諸会堂を巡って、福音を宣べ伝え、人々のありとあらゆる病気を癒された。こうして、イエスの評判はガリラヤを越えてシリア中に広まったと記されています。(マタイ 4・23-24)。イエスの評判はこのカナンの女性が住む異邦の地にまで伝えられていたのでしょうか。けれども、それだけでは、何故彼女がイエスに向って、「主よ、ダビデの子よ」と叫ぶことが出来たのか十分には説明できません。

「主よ、ダビデの子よ」というこの異邦の女性の叫びは、彼女が、旧約聖書に基づいて、ガリラヤのユダヤの人々がイエスにかけた期待を知っていたことを意味しています。「ダビデの子、主よ」という呼びかけは、イエスが旧約聖書の預言者たちが告げていた、神の救いをもたらすメシアであるとの期待を表明することばです。彼女はどこでこのようなイエスへの期待を知ったのでしょうか。考えられることは、イエスの時代よりもずっと前から、ユダヤの人々は地中海沿岸の大きな街々を始め、その当時の世界各地に移住して、そこに彼らの共同体を築いていたということです。そのような外国に住むユダヤ人たちの共同体の中心であるユダヤ人の会堂では、ユダヤの人々が信じる神への信仰を受け入れたユダヤ人以外の、いわゆる「神を畏れる」異邦人たちも数多くその共同体の中に受け入れていたのです。イエスの評判は、そのようなユダヤの会堂を通して、異邦の地にも広がっていったことが考えられます。

イエスに向って「主よ、ダビデの子よ」と叫び続けた今日の福音の女性は、そのようにして、正確に旧約聖書に基づくユダヤの人々のメシア待望を自分のものとしていたことが、彼女のイエスとのやり取りを通して分かります。

「わたしは、イスラエルの家の失われた羊のところには遣わされていない」とイエスが言われたとき、彼女はイエスが何を言われているのか、正確に受け止めることが出来たのです。そしてそれを、決して取り付くしまのない、冷たい拒否のことばだとは受け止めなかったのです。何故なら、イスラエルの人々が待ち望んでいたメシアの救いは、預言者たちが告げているように、異邦の民にも及ぶものであることを彼女は知っていたからです。だから、「子供たちのパンを取って小犬にやってはいけない」という侮辱的とも思えるイエスのことばにもひるむことなく、彼女はあのように言うことが出来たのです。「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパンくずはいただくのです」。このようなことばを聴いた時の、イエスの心の躍動を感じたいと思います。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように」。イエス

のこのことばによって、彼女の個人的な願いが聞き届けられただけではなく、この瞬間に、旧約聖書の神によるアブラハムの選びから始まる救いの歴史は、イスラエルの民を越えて、アブラハムに約束されていたように、地上の全ての人々に向けて大きくその扉が開かれたのです。

このように考えるなら、名前の記されていないこのカナンの女性は、ダビデの子、メシア・イエスの救いに与った、わたしたち全ての者の母であると言ってもいいと思います。イエスとのこのような出会いを果たした、このカナンの女性の名前が福音書に書きとめられていないということは象徴的とも思えます。彼女は無名であるというまさにそのことによって、わたしたちが先週祝った、被昇天の聖母の権化・化身のようにも感じられるからです。聖母もまた、神の使いの前に、そしてイエスの十字架のもとで、一人の女性として、人類の歴史に関わる神の救いの計画をしっかりと受けとめることによって、イエスの救いに与るわたしたち全ての者の母となってくださったからです。

今日の福音の異邦の女性が無名であるということは、さらに、わたしたちへのメッセージであると受け止めることも出来ると思います。この日本という異邦の地に生きるわたしたちカトリック信者は、一人一人がこのカナンの女性のように、聖書が語る神の救いの歴史にしっかりと学んで、ますます激しさ増す悪霊の支配に苦しむ同胞のために、イエスよってもたらされる神の救いの扉が開かれるようイエスに向って叫び続けたいと思います。そのためにも、今日の福音の無名の女性を通して、わたしたちがそのみ顔を仰ぐわたしたちの母、天の栄光に上げられた聖母の取次ぎを願いたいと思います。